



WeNARC

ISSN 1346-5899

近中四農研ニュース

2007

9

NO. 26

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 近畿中国四国農業研究センター



職場体験学習の様子（7ページ参照）

【主な記事】

- ◇巻頭言／阪神・淡路大震災から12年 ―都市と農村の交流について―
(研究管理監(地域営農・地域ブランド担当))
- ◇研究の紹介
 - ・子どもの視点で農業体験学習を評価する(農業・農村のやすらぎ機能研究チーム)
 - ・甘草抽出物による作物病害の防除(生物的病害制御研究チーム)
 - ・白くて美味しい麦ご飯(大麦・はだか麦研究チーム)
- ◇トピックス
 - ・「鳥獣害の実態と被害防止技術習得研修」報告
 - ・「果樹の高品質化技術習得研修」報告
 - ・中学生による職場体験学習
- ◇今後の予定(一般公開、大田研究拠点70周年記念公開シンポジウム、地域マッチングフォーラム)
- ◇人の動き
- ◇新刊のご案内
- ◇地域農業の紹介／日本一のサトイモ産地―新品種による省力機械化一貫体系の確立―
(愛媛県四国中央市)

阪神・淡路大震災から12年 —都市と農村の交流について—

研究管理監（地域営農・地域ブランド担当） 家常 高



平成7年1月17日火曜日の早朝5時46分。阪神・淡路大震災が発生した時刻である。あれから12年が過ぎたが、あの時のことは、まだ記憶に新しい。叩きつけられるような突然の激しい揺れに目を覚

ました。死者・行方不明者は6,436人であった。

この未曾有の災害にあたり、中国農業試験場でも全場的な「兵庫県南部地震の影響に関する調査研究検討委員会」を発足させた。被災時の食料供給の実態、農業生産基盤等の被害実態、農産物流通において産地・都市のチャンネルに与えた影響などについて、地震発生直後から情報収集と緊急調査を行い、3月22日から29日にかけて、神戸地区、淡路地区を中心に本格的な調査を行った。調査結果は、報告書と併せて、中国農業試験場監修『都市型災害と農業・農村—阪神淡路大震災の食料供給・農業への影響—』（農林統計協会、平成10年2月：写真）としてまとめられた。

私も、調査に加わり多くを学ぶことができたが、平成8年4月異動となった。中央水産研究所（5年）、つくば本部（3年）、四国研究センター（2年）と転勤を続け、10年ぶりに福山に再び勤務することとなった。福山で2年目を迎え、機会があれば確かめたいと思っていたこと—震災の調査報告書の中の「町内会とジゲ（農村集落）との交流は今後の安全な都市経営のために欠くことのできない点であると言えよう」について、その後の展開を知りたくて、今夏8月24日に兵庫県庁を訪ねた。



農業関係のメディアや研究では、都市と農村の交流が農村の活性化に有効であるといわれるようになり久しいが、都市サイドではどのように考えているのであろうか。

震災の時に食料と水が届けられなかったために、被災地及び被災者は不安な数日を過ごした。その経験から、都市では農村との交流を重要視した具体的

な都市計画が立てられていることと思ひ、県政動向における交流の実態を取材した。

神戸では、街の賑わいが震災前に戻ったという声は聞かれなかった。この間、「阪神・淡路震災復興計画」を受け各種事業を支えた「財団法人阪神・淡路大震災復興基金」のもと、住宅対策、生活対策、産業対策、教育対策、自主事業と力強く復興事業を進めてきた。この復興過程は、復興10年委員会『復興10年総括検証・提言報告』（平成17年3月）として大部のものにまとめられた。激動の10年であり、復旧から復興への多大な努力に対し敬意を表したい。

平成19年2月の兵庫県「阪神・淡路大震災“復興の成果を県政に生かす”3ヶ年推進方策」では、今後の大規模災害に備えた減災・復興の仕組みを作り、災害に強い基盤整備等を推進するために、六甲山「水と緑の回廊」としてグリーンベルト整備と、「災害時における食料の安定供給等」を施策目標の一つとして掲げている点に注目したい。後者は、災害時における食料の安定供給や農地保全、ため池の管理、災害に強い漁港づくりなどの推進を図ろうとするものであり、これらの施策視点の先には、農村との連携あるいは、交流に準じたソフト面でのメニューが自ずと必要になる。

全国的な交流方策例としては、日本中の商店街の仲間が互いに助け合うという「全国商店街震災対策連絡協議会」の設立や、「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」（平成11年7月設立）における毎年1月17日の「おむすびの日」の普及啓発が挙げられる。前者の活動は、阪神大震災など都市災害における避難者の疎開を受け入れるためのネットワークとして機能しており、農村も多く加入している。後者の例は、震災でボランティアによるおむすびの炊き出しが人々を大いに助けたことから、いつまでもこの善意を忘れず、さらに人と人の心を結ぶ、「おむすび」の日を作ろうとして、神戸市が発言元で、全国各地で普及啓発しようとする運動である。地道ではあるが、『震災を切り口にした地域間交流』へ都市発の交流方策ソフトは少しずつ着実に育っている様である。今後とも、秩序ある都市・農村交流の更なる進展に注目したい。

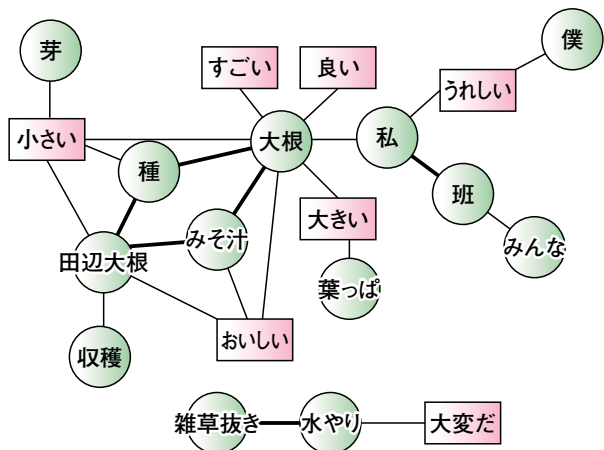
子どもの視点で農業体験学習を評価する

ある全国調査によると、今日、8割の小学校が農業体験学習を実施しています。農業体験学習は農業者、農地、農作物が希少な都市部での需要が大きいと思いますが、近畿農政局の調べによると都市部での実施は4割におよびません。最大の理由は「身近に場所や施設がない」です。その意味では工夫次第で栽培地が確保でき、組織的・系統的な学習が可能な点で、学校は最適地です。

大阪市阿倍野区も典型的な都市部です。最寄りのターミナル駅は天王寺駅です。約15万人が居住しますが農業者も農地もゼロです。ただし幻の野菜が栽培されています。「なにわの伝統野菜」です。

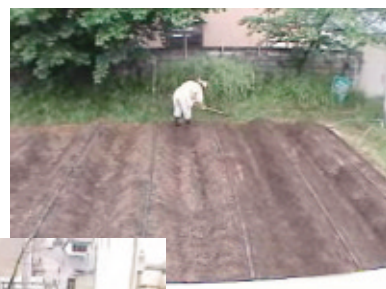
阿倍野区にある大阪市立長池小学校（児童数約320名）が校内の畑で「なにわの伝統野菜」の一つ、田辺ダイコンの栽培を始めて今年が8年目です。田辺ダイコンは旧・田辺村（町）時代に栽培されていた地方品種です。1年生から6年生が各1人ぐらい集まり、6年生を班長にした班を編成し、全校で栽培します。

収穫を終え田辺ダイコンのみそ汁を飲んだ後、子どもたちと先生に「感想文」を書いてもらいます。今年度で3年目の自由記述調査です。感想文の中にどのような単語が記述されているのか、その特徴や傾向を分析することで、子どもたちや先生が農業体験学習をどのように評価しているかを分析します。



テキストマイニングという手法です。図は頻繁に使われる単語同士の関係をソシオグラムという方法で描画した評価マップです。直接の関心は田辺ダイコン関係の単語にありますが、副次的なものとして班活動への関心があります。一人っ子の多い今日、異学年で取り組む効果を、同校は「地域のお兄ちゃん・

お姉ちゃん創出効果」と呼んでいます。この効果、いつかは恋に至るかもしれません。「わたしは、もう一度ぬいてみると、『ガブッ』とぬけました。そして、みると、すごく大きくて、もつとすごく重く



てはんちゃんさんに持ってもらいました。その時に(やさしいなあ。)と思って、ほっぺたが少し赤色になりわらい顔になりました。」(引用は3年生の女子児童。誤字のみ修正し、原文のまま)

右上の写真は、雨のため子どもたちが畑に出られなかった時です。畝立てをしているのは、この研究プロジェクトのリーダー（当時）の方です。支援者の中には農政局OBの方もいます。農政局勤務中は土に触れる機会がなかったそうです。他にも、これまでは種苗店の番頭さん、今は不動産経営や民間研究所勤務の保護者の方など。今年度は、漬物屋さんが収穫後の漬物作りを提案しています。

長池小学校の農園活動は「ふれあいタイム」という授業枠で実施されます。左下の写真のようなぎわいになります。「ふれあい」とは、ダイコンや自然とのふれあいだけでなく、他の児童や支援する大人など他者とのふれあい（相互作用）でもあります。

支援する大人は、農業体験マニュアルに記載されているような農家、JA、普及センター、役場の産業課でもありません。現在、農林水産省が検討している「教育ファーム」は農林漁業者による指導を対象にしていますが、非農業者も含む幅広い大人たちによる応援も「応援」してもらえればと思います。(農業・農村のやすらぎ機能研究チーム 室岡 順一)
http://wenarc.naro.affrc.go.jp/team_group/team/08_socialeffects/

甘草抽出物による作物病害の防除

「できることなら農薬は使いたくない」、農作物を栽培する人にとってこれは切なる願いです。そこで、生物的病害制御研究チーム（福山）では、漢方薬やハーブ類などの植物に含まれる天然抗菌物質を利用した病害防除技術について研究を行っています。研究の発端は地元の製薬会社から相談を受けた甘草抽出物です（図1）。甘草（カンゾウ）とは中国東北部、モンゴル、シベリアなどユーラシア大陸に自生するマメ科多年草（図2）で、甘草の根には砂糖の約170倍の甘さを有するグリチルリチン酸及びイソリクイリチゲニン等の抗菌性のあるフラボノイドが含まれています。甘草根は薬店でも市販され、湯煎したものを漢方薬として飲みます。古来より甘草は医薬品、化粧品、食品等の分野で幅広く利用されてきました。甘草根よりグリチルリチン酸の結晶を分離後の抽出液はこれまで廃棄されてきましたが、これにはグリチルリチン酸の他に高含量のフラボノイド類が含まれているので、これを病害防除に活用することを目的に製薬会社と共同研究を開始しました。研究にはこの甘草抽出物の他にフラボノイド類のみを含む油性甘草抽出物も使用しました。



図1 甘草抽出物の外観

これまでに、甘草抽出物の各種植物病原菌に対する抗菌活性、キュウリべと病、炭疽病、褐斑病、トマト疫病、褐色輪紋病、ピーマン斑点病等を対象にしたポット試験を行い、その発病抑制効果を明らかにしました（図3）。ポット試験では甘草抽出物をキュウリ、トマトの下位葉に噴霧すると、これが噴



図2 甘草の花



図3 キュウリべと病に対する甘草抽出精製物の発病抑制効果（対照は、蒸留水を散布・風乾後にべと病菌を接種した。）

霧されていない上位葉での病斑を減少させる効果が認められました。またキュウリべと病及び炭疽病では露地で圃場試験を行っています。

甘草以外の各種薬草の抽出液についても、抗菌性やポット試験での発病抑制効果を調べていますが、種類によっては、植物に噴霧すると激しい薬害を生じる場合があります、必ずしも天然物だから安全という訳ではありません。この様な中で、甘草抽出物は植物に薬害もなく、元来人間に対する安全性も高い素材ですから、有望と考えています。

なお、本研究については独立行政法人科学技術振興機構が実施する地域イノベーション創出総合支援事業「シーズ発掘試験」の平成19年度の採択課題（甘草抽出物による植物病害防除機作の解明）に決定しました。甘草抽出物の作用機作を更に解明して、新しい病害防除の技術シーズにしたいと考えています。

（生物的病害制御研究チーム 宮川 久義）

http://wenarc.naro.affrc.go.jp/team_group/spteam/b04_biocontrol/

白くて美味しい麦ご飯

大麦（裸麦）は、米や小麦などの他の穀物に比べてポリフェノール含量が高く、加熱により変色（褐変）することが知られています。また、炊飯後の保温により色がさらに悪くなり、麦ご飯のイメージを悪くしています。近年、パック入りの麦ご飯や冷凍麦ご飯などが販売されており、加工業者からはより色の悪くならない大麦品種が求められています。

大麦にもモチ性の品種があり、モチ性品種は、麦ご飯として炊飯した場合に通常のウルチ性品種より、食感と食味が良い特徴があります。

食味に優れているモチ性品種ですが、以前に栽培されていたモチ性品種は在来種と呼ばれ、古くからその地域で栽培されていました。在来種は、ポリフェノール含量が高いだけでなく、稈長が高く成熟期が遅いなど、栽培し難い特徴があったことから、広く栽培するには栽培性の改良が重要であり、栽培性の改良について重点的に品種改良を行ってきました。平成9年に開発した「ダイシモチ」は栽培性に関して、現在栽培されているウルチ性品種と遜色の無い程度まで改良されてきました。しかし、ポリフェノール含量が高く、炊飯等の加熱によって褐変しやすく、さらに炊飯後の保温で、より褐変が進むなどの欠点があり、品質に関しては改良する余地が残されています。

現在、ポリフェノール含量を低下させ、加熱後の色が悪くならないモチ性品種の開発を進めています。

ポリフェノールには多くの種類があり、その中でも、プロアントシアニジンとよばれているものが、加熱後の褐変に大きく関わっていることが明らかにされています。また、ビール麦の品種改良の中からプロアントシアニジンフリーというプロアントシアニジンを作らなくなる遺伝子を持つ品種が開発されました。そこで、当チームでは、このプロアントシアニジンフリー遺伝子を交配により大麦（裸麦）に導入することで、ポリフェノール含量を低下させ、加熱後の色が悪くならないモチ性品種の開発を進めています。モチ性品種に、プロアントシアニジンフリー遺伝子のひとつ *ant13* 遺伝子を導入したところ、ポリフェノール含量が明らかに低くなり、

加熱後の色が改善されました（図1）。また、保温によりイチバンボシやモチ性品種の色が大きく変化したのに対し、保温後の色も良好であり、色の変化が小さくなりました（図2）。これらの

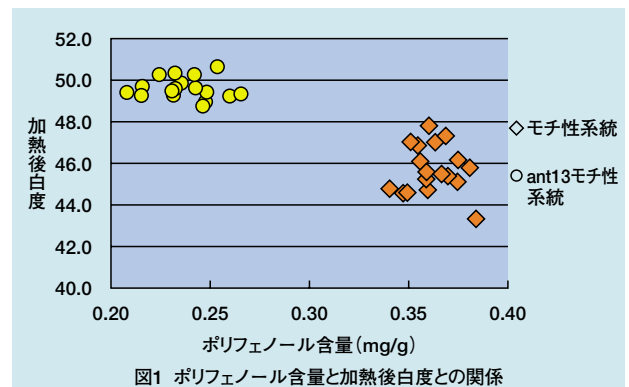


図1 ポリフェノール含量と加熱後白度との関係

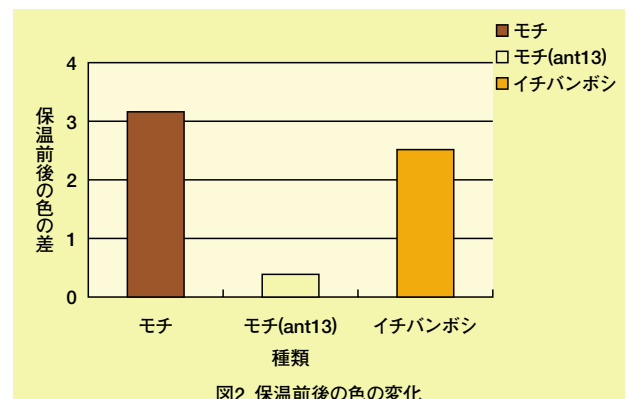


図2 保温前後の色の变化

系統は、まだ栽培性などが不十分であり、更に改良を進めています。現在、主に利用しているプロアントシアニジンフリー遺伝子は *ant13* と *ant28* ですが、その他に数種類の同様な遺伝子があり、これらを導入してその効果を現在調査し、系統の開発を行っています。

プロアントシアニジンフリー遺伝子を導入したモチ性系統ですぐに品種として栽培できるものではありませんが、これらの中から優れているものを今後各地で栽培適性を評価してもらい、白くて美味しい麦ご飯として食卓に上ることが出来るよう品種改良を進めています。

(大麦・はだか麦研究チーム 高山 敏之)
http://wenarc.naro.affrc.go.jp/team_group/team/04_barley/

「鳥獣害の実態と被害防止技術習得研修」報告

6月27日～29日までの3日間、近畿中国四国農業研究センター大田研究拠点（鳥根県大田市）の「和牛会館」を会場に、「鳥獣害の実態と被害防止技術習得研修」が行われました。この研修は、農業普及関係者が農業現場における技術的問題の解決に必要な能力の向上を図ることを目的とするもので、本年度、農林水産省経営局普及課が開催する革新的農業技術習得研修の一環として、実施されたものです。

研修は27日午後から始まり、まずはイノシシの生態や行動特性に基づいた被害対策や捕獲方法について講義が行われました。講義終了後に、イノシシの飼育施設に移動し、イノシシの行動試験を体験した後に、飼育イノシシを観察しました。28日は、サル・ハクビシン・タヌキ・ヒヨドリの生態や行動特性とそれに基づいた被害対策について講義が行われました。講義終了後に、鳥獣害実験棟前にある鳥獣害対策エリアに移動して、イノシシの捕獲技術の実習を行いました（写真1）。29日は、美郷町乙原の展示圃場を見学しながら、現場で総合討論を行いました。この圃場は美郷町の吾郷地域の婦人会のみなさんが中心となってサルから守りながら元気に畑を作っている所です（写真2）。

今回の研修会に参加した受講者からは、現場で役立つ情報を得ることができ、またより実践的な技術が身についたと好評をいただきました。

（鳥獣害研究チーム 上田 弘則）



写真1 イノシシの捕獲方法の実習



写真2 総合討論（美郷町乙原の展示圃場）

「果樹の高品質化技術習得研修」報告

7月24日、25日の2日間、近畿中国四国農業研究センター四国研究センター生野地区（香川県善通寺市）において、「果樹の高品質化技術習得研修」が開催されました。神奈川県から沖縄県まで、果樹栽培技術の普及に携わる23名の方々が参加され、講義や見学とともに、かん水施設の組み立てを実習しました。

この研修会では、近年、温暖化を背景に異常気象が発生し、樹体が水ストレスを受けやすくなっていると考えられることから、おいしい果実を毎年安定して生産するためにどのような水管理が適切かを考えるため、枝を中心とした樹体内水分状態の変化と果実品質、点滴かん水施肥施設の利用方法について講義が行われました。最近の研究から、樹種によって導管の太さが異なり、枝の通水性が違うことや、水のルートとして知られている導管は、果実が肥大する時期になるとつぶされて水の通路としての機能を失い、これに代わって篩管が枝から果実への主要な水の通路となることが紹介されました。また、三重大学の奥田准教授から、ウンシュウミカン果実の生育期間中には、枝の水分が減少して果実品質に大

きな変化が見られる時期があることが報告されました。

見学では、シートマルチ点滴かん水施肥装置（マルドリ方式）を設置した所内カンキツ園を視察するとともに、基本的な点滴かん水施肥装置の設置と管理方法について講義で説明されたあと、実習として



写真1 所内カンキツ園の視察

「鳥獣害の実態と被害防止技術習得研修」報告

6月27日～29日までの3日間、近畿中国四国農業研究センター大田研究拠点（鳥根県大田市）の「和牛会館」を会場に、「鳥獣害の実態と被害防止技術習得研修」が行われました。この研修は、農業普及関係者が農業現場における技術的問題の解決に必要な能力の向上を図ることを目的とするもので、本年度、農林水産省経営局普及課が開催する革新的農業技術習得研修の一環として、実施されたものです。

研修は27日午後から始まり、まずはイノシシの生態や行動特性に基づいた被害対策や捕獲方法について講義が行われました。講義終了後に、イノシシの飼育施設に移動し、イノシシの行動試験を体験した後に、飼育イノシシを観察しました。28日は、サル・ハクビシン・タヌキ・ヒヨドリの生態や行動特性とそれに基づいた被害対策について講義が行われました。講義終了後に、鳥獣害実験棟前にある鳥獣害対策エリアに移動して、イノシシの捕獲技術の実習を行いました（写真1）。29日は、美郷町乙原の展示圃場を見学しながら、現場で総合討論を行いました。この圃場は美郷町の吾郷地域の婦人会のみなさんが中心となってサルから守りながら元気に畑を作っている所です（写真2）。

今回の研修会に参加した受講者からは、現場で役立つ情報を得ることができ、またより実践的な技術が身についたと好評をいただきました。

（鳥獣害研究チーム 上田 弘則）



写真1 イノシシの捕獲方法の実習



写真2 総合討論（美郷町乙原の展示圃場）

「果樹の高品質化技術習得研修」報告

7月24日、25日の2日間、近畿中国四国農業研究センター四国研究センター生野地区（香川県善通寺市）において、「果樹の高品質化技術習得研修」が開催されました。神奈川県から沖縄県まで、果樹栽培技術の普及に携わる23名の方々が参加され、講義や見学とともに、かん水施設の組み立てを実習しました。

この研修会では、近年、温暖化を背景に異常気象が発生し、樹体が水ストレスを受けやすくなっていると考えられることから、おいしい果実を毎年安定して生産するためにどのような水管理が適切かを考えるため、枝を中心とした樹体内水分状態の変化と果実品質、点滴かん水施肥施設の利用方法について講義が行われました。最近の研究から、樹種によって導管の太さが異なり、枝の通水性が違うことや、水のルートとして知られている導管は、果実が肥大する時期になるとつぶされて水の通路としての機能を失い、これに代わって篩管が枝から果実への主要な水の通路となることが紹介されました。また、三重大学の奥田准教授から、ウンシュウミカン果実の生育期間中には、枝の水分が減少して果実品質に大

きな変化が見られる時期があることが報告されました。

見学では、シートマルチ点滴かん水施肥装置（マルドリ方式）を設置した所内カンキツ園を視察するとともに、基本的な点滴かん水施肥装置の設置と管理方法について講義で説明されたあと、実習として



写真1 所内カンキツ園の視察



写真2
点滴かん水用チューブ
の接続実習

点滴かん水用チューブの接続を行いました。接続作業後、水を流して水漏れの確認をしましたが、漏れは見つからず、担当した参加者の方々には安堵の色が見えました。

総合討論では、点滴かん水施肥装置の液肥利用方法を始め、カンキツの浮き皮とかん水の関係など、活発な議論が行われました。参加者の方々が担当する果樹は様々でしたが、今回の研修で得た知識や経験を活かして、普及活動を進めて頂きたいと思います。

(次世代カンキツ生産技術研究チーム 平岡 潔志)

福山市内中学生による職場体験学習

本所（福山市）では8月20日（月）～24日（金）にかけ、福山市内の2つの中学校から生徒9名を受け入れ農作業等の体験をしていただきました。

この取り組みは全国的にも実施されている職場体験学習（生徒が職場で労働することを通じて、職業や仕事について体験をする学習活動）への協力と、地域社会への貢献を目的としているもので、生徒の受け入れは今年で4年目になります。

うだるような猛暑のなか、作業日程を作成し、日々の指導を担当した業務第1科の職員と一緒に、生徒達も大汗をかきながら農作物の剪定作業などの農作業に取り組んでくれました。

生徒達は、普段は全く経験しない作業や動きに少々とまどい気味でしたが、業務第1科の職員が「何故この作業をするのか」ということを丁寧に説明しながら指導にあたり、難しい作業にも徐々に慣れていきました。

全ての日程が終了後、生徒達からは「普段の生活ではできない、いろんな体験ができて良かった」「作

物を作ることがこんなに大変とは思わなかった」などの感想が寄せられました。未来を担う子供達が、このような体験を通じ、農業や農業研究の大切さに少しでも理解と関心を持ってもらえれば、農業試験研究機関や機関の職員としても大変意義があり、喜ばしいことだと思います。

(企画管理部 情報広報課)



今後の予定

平成19年度 近畿中国四国地域マッチングフォーラム 開催のご案内

地域農業の振興のため、研究者、普及指導員、生産者が情報交換等を行い、お互いのニーズや問題点を把握するとともに、より効果的な成果の発信・普及等に取り組むことを目的として開催します。今年度は、「果樹関連成果」を題材とし、下記の日程で、以下の2つの分科会形式で開催しますので、お越し下さい。

開催日時：平成19年11月14日（水）13:30～17:00

開催場所：福山労働会館「みやび」（広島県福山市南蔵王町4-5-18）

テーマ：広げよう技術と普及の輪

1. 落葉果樹分科会 2. 常緑果樹分科会

主催：農林水産省農林水産技術会議事務局、(独)近畿中国四国農業研究センター

協賛：農林水産省近畿農政局、農林水産省中国四国農政局、社団法人農林水産技術情報協会

問い合わせ先：近畿中国四国農業研究センター 企画管理部 情報広報課 (TEL:084-923-5385)



写真2
点滴かん水用チューブ
の接続実習

点滴かん水用チューブの接続を行いました。接続作業後、水を流して水漏れの確認をしましたが、漏れは見つからず、担当した参加者の方々には安堵の色が見えました。

総合討論では、点滴かん水施肥装置の液肥利用方法を始め、カンキツの浮き皮とかん水の関係など、活発な議論が行われました。参加者の方々が担当する果樹は様々でしたが、今回の研修で得た知識や経験を活かして、普及活動を進めて頂きたいと思います。

(次世代カンキツ生産技術研究チーム 平岡 潔志)

福山市内中学生による職場体験学習

本所（福山市）では8月20日（月）～24日（金）にかけ、福山市内の2つの中学校から生徒9名を受け入れ農作業等の体験をしていただきました。

この取り組みは全国的にも実施されている職場体験学習（生徒が職場で労働することを通じて、職業や仕事について体験をする学習活動）への協力と、地域社会への貢献を目的としているもので、生徒の受け入れは今年で4年目になります。

うだるような猛暑のなか、作業日程を作成し、日々の指導を担当した業務第1科の職員と一緒に、生徒達も大汗をかきながら農作物の剪定作業などの農作業に取り組んでくれました。

生徒達は、普段は全く経験しない作業や動きに少々とまどい気味でしたが、業務第1科の職員が「何故この作業をするのか」ということを丁寧に説明しながら指導にあたり、難しい作業にも徐々に慣れていきました。

全ての日程が終了後、生徒達からは「普段の生活ではできない、いろんな体験ができて良かった」「作

物を作ることがこんなに大変とは思わなかった」などの感想が寄せられました。未来を担う子供達が、このような体験を通じ、農業や農業研究の大切さに少しでも理解と関心を持ってもらえれば、農業試験研究機関や機関の職員としても大変意義があり、喜ばしいことだと思います。

(企画管理部 情報広報課)



今後の予定

平成19年度 近畿中国四国地域マッチングフォーラム 開催のご案内

地域農業の振興のため、研究者、普及指導員、生産者が情報交換等を行い、お互いのニーズや問題点を把握するとともに、より効果的な成果の発信・普及等に取り組むことを目的として開催します。今年度は、「果樹関連成果」を題材とし、下記の日程で、以下の2つの分科会形式で開催しますので、お越し下さい。

開催日時：平成19年11月14日（水）13:30～17:00

開催場所：福山労働会館「みやび」（広島県福山市南蔵王町4-5-18）

テーマ：広げよう技術と普及の輪

1. 落葉果樹分科会 2. 常緑果樹分科会

主催：農林水産省農林水産技術会議事務局、(独)近畿中国四国農業研究センター

協賛：農林水産省近畿農政局、農林水産省中国四国農政局、社団法人農林水産技術情報協会

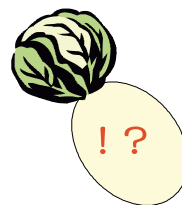
問い合わせ先：近畿中国四国農業研究センター 企画管理部 情報広報課 (TEL:084-923-5385)

平成19年度 近畿中国四国農業研究センター 一般公開のお知らせ

綾部 研究拠点

「環境にやさしい野菜づくり」

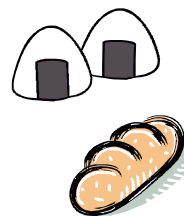
- 日時：平成19年10月4日(木) 10:00~15:00
場所：近畿中国四国農業研究センター 綾部研究拠点
(京都府綾部市上野町上野200 TEL 0773-42-0109)
- 研究成果の紹介・展示
 - 野菜栽培相談
 - 土壌分析・診断(コップ1杯の土を持参して下さい)
 - ほ場見学(ナス天敵ハウス・イチゴの高設栽培・ソーラーファン)
 - 接ぎ木体験(‘キャベコン’に挑戦!上がキャベツで下が○○コン!?)
 - 試食(焼き芋)
 - 即売(美山町野菜生産グループ)
 - ご来場者にはパンジー苗をプレゼント(数量限定)



福 山 (本 所)

「地球と私にやさしい農業を考えよう」

- 日時：平成19年10月6日(土) 9:30~15:00
場所：近畿中国四国農業研究センター
(福山市西深津町6-12-1 TEL 084-923-4100)
- 研究成果の紹介・展示
 - 農業技術相談(イネの栽培、作物の病虫害など)
 - ほ場見学
 - 公開講座「バイオ燃料を考えよう」
講師：近中四農研センター バイオマス利用グループ 安武正史
 - 筋力測定コーナー
 - 子供科学教室
 - さつまいも掘り(子供対象 9:45~11:30/13:00~芋がなくなるまで)
 - 木のねんど教室(10:00~12:00/13:00~14:30)
リサイクルや環境に配慮された「木のねんど」でキーホルダーを作ろう!
 - 試食(数量限定)
 - ・低グルテン米「LGCソフト」のおにぎり(9:30~/11:30~)
 - ・米粉パン(10:00~/12:00~/13:00~)
 - 即売(上下町で採れた新鮮野菜・加工品、ソフトクリーム)



四 国 研 究 セ ン タ ー

「来て、見て、体験! 夢のある地域農業」

- 日時：平成19年10月27日(土) 9:00~15:30
場所：近畿中国四国農業研究センター四国研究センター 仙遊地区
(香川県善通寺市仙遊町1-3-1 TEL 0877-62-0800)
- 研究成果の紹介・展示
 - 農業技術相談
 - ミニ講演会
 - 9:30~ 風通しの良い手作り高強度ハウスを作ってみませんか?
足場パイプを利用した片屋根型ハウスの作り方と、換気性を良くすることのメリットを説明します。
 - 10:30~ ソーラーポンプで水も肥料も節約 ー大湯水に備える技術ー
湯水の危険は毎年のようにあります。ソーラーポンプで作物の必要なだけの水を必要な時だけに与えます。
 - 11:30~ 新しい米作り ー作ってみよう 鉄コーティング種子ー
磁石でくっつく種子を実験してみませんか?実演・サンプル展示と共に説明します。
 - 12:30~ タイエット!?ガン予防!?ミカンが秘めたスゴいパワー!!
ミカンはおいしいだけでなく、スゴいパワーを秘めている!ミカンを食べるといいことがたくさんあるのです!
 - 13:30~ 香川県の灌漑水利用の特徴
香川県では灌漑水の繰り返し利用が多くみられ、それが環境への負荷を抑制することに繋がっています。
 - 14:30~ 知っていますか?四国のサトウキビ栽培
サトウキビ全般についての話と四国におけるサトウキビ栽培の現状を紹介します。
 - ゲーム・クイズ
 - ・大豆のはしつかみゲーム(9:15~/11:00~/13:00~/15:00~)
 - ・農業○×クイズ(10:00~/12:00~/14:00~)
 - ・シールスタンプラリー
 - 実験・体験
 - 9:00~15:30 農作業機械に乗ってみよう
 - ・工具であそぼう(ネジの製作体験)
 - ・自分で組み立ててみよう自動灌水装置
 - 9:00~11:30 顕微鏡で見る 肥満の原因「脂肪細胞」
 - 12:00~15:30 葉っぱの血管を見てみよう(葉脈のしおり作り体験)
 - 試食(はだか麦を使ったおにぎりやお茶、ヤーコンのきんぴら、まるどりみかん)
 - 即売(花き、ヤーコン・大豆などの加工品)
- 後 援：善通寺市教育委員会



大田研究拠点70周年記念および肉用牛研究会島根大会公開シンポジウム

「中国地域における黒毛和種繁殖雌牛の少頭数放牧技術開発の現状と展開方向」

開催日時：平成19年10月25日(木) 11:00～16:00

開催場所：島根県立男女共同参画センター「あすてらす」 1階ホール

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ236-4 (JR大田市駅西隣)

<http://www.asuterasu.pref.shimane.jp/>

主催：近畿中国四国農業研究センター、肉用牛研究会

後援：農林水産省中国四国農政局

内容：11:00 開会

11:10～

- ・ 耕畜連携からみた中国地域の黒毛和種繁殖雌牛少頭数放牧の現状と推進方向
(農林水産省中国四国農政局畜産課長 平尾 正倫)
- ・ 黒毛和種繁殖雌牛の少頭数放牧を取り込んだ集落営農の展望について
(広島県東広島農林事務所 石倉 典子)

12:00 昼食・休憩

13:00～

- ・ 山口型放牧「農業・環境・地域が蘇る放牧維新」とは
(農業ジャーナリスト 吉田 光宏)
- ・ 近畿中国四国農業研究センターにおける黒毛和種繁殖雌牛少頭数放牧の技術開発研究について
一農林水産研究高度化事業地方領域「小規模放牧」の研究結果から一
(近中四農研センター粗飼料多給型高品質牛肉研究チーム長 山本 直幸)
- ・ 黒毛和種繁殖雌牛の野草地放牧時の代謝プロファイルテスト
(家畜改良センター鳥取牧場 渡邊 貴之)
- ・ 獣害回避に及ぼす和牛小規模放牧の効果について
(近中四農研センター鳥獣害研究チーム長 井上 雅央)
- ・ 中国中山間地域における黒毛和種繁殖雌牛の資質改良について
(全国和牛登録協会会長 福原 利一)

15:10～ 総合討論

16:00 閉会

問い合わせ先：近畿中国四国農業研究センター大田研究拠点内
第45回肉用牛研究会島根大会事務局 担当：小林
TEL：0854-82-0144

人の動き

依頼研究員

受入研究チーム等	期 間	受入件数
地域営農・流通システム研究チーム	平成19年9月3日～平成19年12月7日	1件

技術講習生

受入研究チーム等	期 間	受入件数
レタスビッグベイン研究チーム	平成19年7月25日～平成19年7月27日	1件
地域営農・流通システム研究チーム	平成19年9月3日～平成19年9月7日	1件
生物的病害制御研究チーム	平成19年9月3日～平成19年9月14日	1件

新刊のご案内

書 名	発行年月	著 者 等
●飼料用稲生産技術マニュアル	2007.8	中山間耕畜連携・水田輪作研究チーム

日本一のサトイモ産地を目指して—新品種による省力機械化一貫体系の確立— ～愛媛県 四国中央市～

1 地域の概要

四国中央市は、「やまじ風」(春や秋を中心としてこの地域に吹く南よりの強風、日本3大局地風の1つ)が吹くため、その影響が少ないサトイモの産地として、江戸末期より発展しており、その栽培面積は約190haです。

この地域のサトイモ品種“女早生”は、土質の良さもあり、①肉質が柔らかい、②粘りが強い、③ゴリ(水晶芋)が少なく良食味、④品質が長期間安定している等の特徴を持ち、高い市場評価を得ています。

現在、高付加価値化を図るため、生産農家と関係機関が連携し、新品種や省力・多収穫栽培技術の開発と定着に取り組んでいます。

2 これまでの取り組み

①サトイモ優良系統選抜と新品種育成による差別化
平成6年、JA、県農業試験場、普及組織が一体となり、優良系統選抜と品種改良を開始し、平成16年に、収量が多く秀品率が高い新品種“愛媛農試V2号”の品種登録を出願しました。

②サトイモ新品種“愛媛農試V2号”の産地化
県農試で開発した「親芋副芽を利用したプラグ苗による大量増殖法」を用い、生産部会、関係機関が一体となって増殖を行っており、平成20年度に品種を“愛媛農試V2号”に統一することを目指しています。

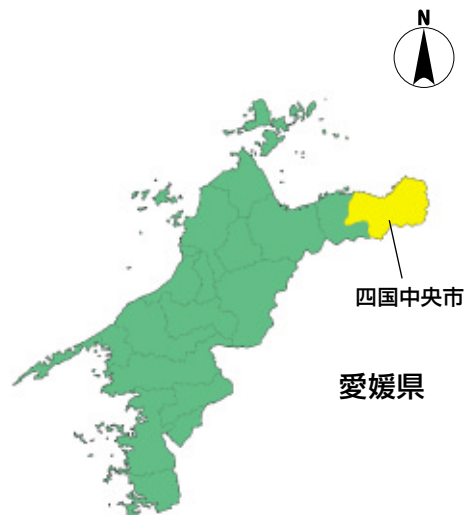
③マルチ栽培による飛躍的な収量・品質の向上
高品質安定生産技術として約70haまで拡大しています。

3 新たな課題への取り組み

①JAと青果業者が連携した農業振興
四国中央農業指導班を中心に、JA、青果業者が一体となり、新品種への転換と種芋供給システムの確立を図るとともに、ブランド化について検討しています。指導班では、今後もJAと青果業者に技術指導や実証成果等の提供を行い、産地拡大を図る予定です。

②産学官連携経営革新技術普及強化促進事業を導入
農林水産省の提案公募型事業である本事業を利用し、普及組織が中核となって、新品種“愛媛農試V2号”の早期普及のため機械化一貫体系と省力栽培技術の確立を目指しています。

③今後の方針
農業試験場と連携して、タイプの違うサトイモ新



品種の開発に取り組むとともに、JAだけでなく販売能力のある青果業者を巻き込んで産地化を進めることで、地域の活性化を図っており、本地域がモデル産地として発展することで、現在全国第7位の愛媛のサトイモが、将来日本一をねらえる立場となることを目指しています。

(愛媛県西条地方局 農政普及課 四国中央農業指導班 主席普及指導員 玉置 学)

<http://www.pref.ehime.jp/090sai/420misima-nokai/00002400030129/misima/>



愛媛農試V2号(現在許諾は県内限定)